シンコウカイ
親江会だより

No. 269号 2025年10月12日発行
発行：親江会（江戸川区原爆被害者の会）
事務局：〒134-0087
江戸川区清新町1-1-36-604　高比良方
電話＆FAX：03-5675-2354
郵便振込取扱票：00110-4-0058774　親江会

『原爆展』開催　被爆者が伝えたい平和の願い

終戦から80年の節目の年を迎え、全国各地で反戦、反核のイベントが多い夏となりました。親江会も8月5日から10日まで、船堀タワーホール展示ルームに於いて、『原爆展』と冠した大きなイベントを開催しました。

メインテーマは核兵器廃絶、そして、広島と長崎が受けた被爆の実相の周知と、被爆者の体験及びその後の人生を通じて、平和へのメッセージを世の中と次世代に伝えることです。被爆体験、被爆映画、講演やトークショー、など多くの催しと展示で、戦争や核兵器のない平和な世界の実現を訴えました。

開会の挨拶で齊藤玉子親江会副会長は、被爆者のサーロー節子さんの言葉を借り、「反核運動は反政府活動ではないこと、自分の苦しみではなく核を使わないことを訴える。核で脅すことをいつまで続けるのか」と自らの背中を押す強い思いを語られました。

8月6日には、5階小ホールにて長崎被爆二世である親江会会員の古今亭菊太楼さんによる新作落語『母のお守り』が披露されました。これは、被爆者の老人があるきっかけで被爆当日の朝にタイムスリップし、亡くなった自分の母親の身を案じるという、涙溢れる落語です。立ち見もでるほど超満員となった会場でも、目頭を拭う観客の姿が多く見受けられました。今後もイベントで話される機会があれば必見の一席です。

菊太楼さんの落語の後は、山本会長とその御実弟である元広島カープ監督の山本浩二さん、そして、落語評論家で元広島県教育委員会教育長でもある寺脇研さんをお迎えしてのトークショーとなりました。


初日から大勢の来場者で賑わいました


普段、新作は創らない
古今亭菊太楼さんの新作落語


笑いと涙、大勢の観客の皆さんの心に刺さる落語となった



参拝式に参列する山本会長に代わり、
齊藤玉子副会長が開会の挨拶を



参拝式から駆けつけ、挨拶に立たれた山本会長

原爆展のイベントの中で、もっとも観客が押し寄せたのが、「ミスター赤ヘル」と呼ばれた、広島カープ元監督の山本浩二さんとのトークショーでした。

山本浩二さんは、１９４６年生まれの被爆二世で、山本会長とは９つ違いの弟さんです。ソフトボール大会でホームランを打ったことや、お父様がカープファンで、ご自分もホームランバッターにあこがれていたことなど、子供の頃の広島での思い出を語られました。

中でも会場を沸かせたのは、山本会長は非常に無口で、現在のように人前で話す姿は、とても想像できないということでした。そしてその姿を見て浩二さんも、ご自分が「被爆二世」であると認識したそうで、「被爆を風化させてはいかんだろうと、口下手な兄がこういうことをするのは、本当に尊敬します。平和を願っています」と話されました。



最も注目度が高かったトークショー。壇上右から寺脇研さん、山本浩二さん、山本宏会長、古今亭菊太楼さん、司会の原田佳子さん（参与会員）

また、広島の街が復興していく様子は、子ども心に記憶にはあるが、「いつの間にか」という感じで、原爆の被害についてはほとんど覚えていないと話されます。

当時、家庭内でも原爆の話はまったくしなかったそうで、それは菊太楼さんの家庭でも同じ。長崎から関東に移ってからも、「原爆の話は絶対にしたらダメ」と、お母さんにきつく言われていたそうです。思い出したくないほどの辛い経験や、被爆者への差別を感じさせられる話題でした。

そして、菊太楼さんの新作落語『母のお守り』について、菊太楼さんは、「会長が気軽に『創ってね』と言うので、最初は冗談かと思った」と。落語評論家の寺脇さんは、「菊太楼さんは古典落語の噺家さんで、新作落語はやらないもの。私も初めて新作を聞いた」と話されます。



通路を埋める埋立ち見客の頭上にカメラを構えて



また、「落語は人を笑わせるものですが、感動させる意味もある。『原爆』という重い話題を、落語で今の時代に伝える大きな意味がある」と評価されました。

最後に菊太楼さんは、「落語をずっと聞ける平和な世の中であって欲しい」と。寺脇さんは、「広島は『原爆いかん』と怒りの広島、長崎はキリスト教の街なので祈りの長崎。ふたつの怒りと祈りを伝えていくことが大切」と締め括られ、涙と笑顔のトークショーとなりました。

アーサー・ビナードさんの紙芝居『ラクカサンブタイ』と『ちっちゃいこえ』

展示ホールイベントスペースを満員にさせたのは、翻訳家であり詩人、また絵本作家でもあるアメリカ出身のアーサー・ビナードさんの紙芝居でした。立ち見どころか座り見も出るほどで、紙芝居のせいか親子連れの姿も多数見られました。

紙芝居は『ラクカサンブタイ』と『ちっちゃいこえ』の2作品。『ラクカサンブタイ』は、「キンタラウ（きんたろう）」隊長率いる動物の落下傘部隊の話です。

戦時下、南の島にアメリカ軍がこっそり作った飛行場を、そのままそっくりいただいてしまおうと、キンタラウ率いる落下傘部隊が活躍し、みごと接収してしまうという話です。

しかしこれは、1942年8月7日に実際にあったガダルカナル島の戦いを、日本とアメリカの立場を裏返しにしたものです。なんと会場にいた子どもの中には、「日本とアメリカが逆になってる」と言う子がいたのには驚かされました。

事実、それまで優勢だった日本軍がガダルカナルの戦いで敗北し、アメリカとの攻守が逆転する転換点となった戦いですが、大本営は「日本軍優勢」とでたらめを伝えたのです。『ラクカサンブタイ』はそんなプロパガンダを表した作品です。

アーサーさんはまたこうも。「ガダルカナルの前のミッドウェーの戦いで、日本海軍が多くの空母を失った時点で日本の敗戦はほぼ決まっていた。にも関わらず、日本にわざと戦争を長引かせるよう仕向け、原子爆弾開発の実験台にしようと企んだとしか考えられない」そう話されました。

もうひとつの『ちっちゃいこえ』は、丸木夫妻の『原爆の図』をモチーフに、アーサーさんが脚本を書いたネコを主人公にした作品です。

原爆は一瞬の炸裂で何もかもを吹き飛ばし、破壊した。けれどそれだけで終わらず、放射能によって、小さな細胞をゆっくり、ゆっくりと壊し続け、何年もかけて殺人を継続していく。『ちっちゃいこえ』とは、ちゃっちゃな細胞の元気な声と悲鳴の意味です。

「丸木夫妻が描いた『原爆の図』は、どれも人物だけで建物は描かれていない。建物はどうせ建て替えられてしまうから。原爆ドームとなった産業奨励館も、被爆していなければ今はきっと建て替えられている。丸木夫妻はそれを言葉ではなく、絵で表現した」とアーサーさんは解説しました。

『ラクカサンブタイ』はアメリカ人らしい表現方法で、『ちっちゃいこえ』は日本人らしい繊細な表現の作品だと感じました。

アーサー・ビナードさん紹介
翻訳家、詩人、絵本作家、米国ミシガン州生まれ。
大学の卒業論文制作時に、日本語や漢字の造形に興味を持ち来日。「原爆の図」をテーマにした紙芝居、広島平和記念資料館の遺品や第五福音丸をテーマにした絵本など執筆している。2020年、谷本清平和賞受賞。


小さな紙芝居の画面に大勢の観客が集中する


紙芝居が終わり子どもたちに質問すると、的確な答えを出すお子さんも



狭いイベントスペースは超満席となった

『黒い雨』トークショー
出演／今村広介　聞き手／御手洗志帆

井伏鱒二の小説を原作に、今村昌平が映画化した『黒い雨』は、入市被爆し、黒い雨を浴びてしまった姪の結婚がテーマの作品です。主人公の田中好子の名演が光り、日本アカデミー賞最優秀作品賞を初め、数々の賞を受賞した名作となりました。

船堀タワーホール5階小ホールにて映画上映後、今村昌平監督の息子さんであり、助監督として『黒い雨』撮影に参加された今村広介氏（今村プロダクション代表）をお招きし、作品にまつわるお話をお伺いしました。



壇上左から今村広介さん、聞き手の御手洗志帆さん

冒頭で『黒い雨』発表から3年後の今村昌平監督の音声が流されました。

「（映画は）姪の結婚が主題。姪が結婚できるかできないかというサスペンスを、小説の筋道を支える推進力にしている」

と昌平監督は語ります。被爆者が差別される当時の風潮を辛辣に描いています。

今村昌平監督の音声は、作品を撮るまでの原作者・井伏鱒二へのアプローチやエピソードが中心で、すでに書籍となっている自著にも、真っ赤になるほど朱（校正）を入れている怪物・井伏を、どうやって解きほぐし、映画化の許諾を得たのかなど、〝酒呑み〟原作者とのやりとりが語られていました。



映画はモノクロだが、エキストラの特殊メイクは当然、通常の色付きのメイクが施される

広介さんも、「姪に結婚させたい叔父さんの執念が核。井伏さんが（他にも来ていた映画化の話を）オーケーしなかったのは、反原発とか反戦の旗印にされるのが嫌だったのではないか。父はそこを汲み取った。酒の力も借りて」と語られました。

また、『黒い雨』制作の裏側も紹介されました。作品はモノクロですが、登場する被爆者たちの特殊メイクは、もちろん通常の色が使われていて、作品中ではほとんど見えないものにも丹念なメイクを施していたことなどを語られました。

第21回江戸川平和コンサートのお知らせ

歌と音楽で平和を繋ぐ江戸川平和コンサートが今年も開催されます。演目は、原爆展でも反戦の紙芝居を演じていただいたアーサー・ビナードさんの講演、長崎の被爆3世でプロシンガーの上奥まいこさんの歌と伊藤心太郎さんのピアノ演奏、区内の子どもたちの演舞など、バラエティーに富んだものを予定しています。お誘い合わせの上ご来場ください。

日時　2025年 11月 30日（日）
13時30分～
タワーホール船堀 小ホールにて

た。

意外に苦労したのが「黒い雨」そのもので、どんな黒さでどんな粘度かなど、いろいろな「黒い雨」を作っては試したとおっしゃっていました。

また、「最後のシーンは何千万円もかけて撮って繋いでみたが良くないということで、切るという判断をするんですけど、撮影の川又さんが怒り狂ってました」とエピソードを披露。「これは、井伏鱒二の『黒い雨』に『今村昌平』の黒い雨を足してより良い作品にしたかったが、井伏の『黒い雨』にはかなわなかったのではないか。そして、そのままでは終われないので、モノクロなりのシナリオに書き直して撮り直し、フィニッシュした。普通はそんなことしない。ビジネスにならないから」とも。

そのシーンは、昭和38年頃の広島の街を、お遍路姿の田中好子がさまよい歩くシーンで、クルマもバスも道ゆく人々のファッションも、全て昭和38年当時のものを揃えた。にもかかわらず全カットで、数千万円分がふっとんだとおっしゃっていました。調べたところ、そのシーンは、『黒い雨』DVDのデジタルニューマスター版に使われているようです。必見の作品です。

感謝

（2025年4月～8月）
親江会会費、参与会員会費納入者
（敬称略、順不同）

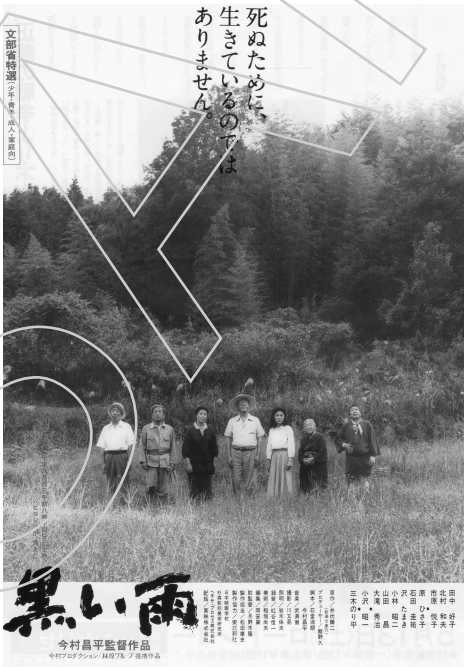
秋元　民子
秋元　智子　　貫　　泰夫　　柿沼　正恵
河井とし子　　貫　　雄彦　　中原美智子
上里　勇吉　　中川　信子
林　　道雄　　渡辺小夜子
佐藤　美博　　大島　忠義
若杉　辰巳　　川端禮治郎
大楠　武徳　　川口　啓子
大楠　栄子　　小前はるみ
岡田　健二　　堤　　竹義
石丸　京子　　堤　　晶子
加藤　康子　　藤居阿紀子
松岡　　優　　水澤　貞子
柳井　礼子　　中本　敬一
石川　憲志　　乾　　善紀

寄付、カンパ

大楠　武徳
川口　啓子
小島　柾子
湊　　武
豊友会 山田玲子
竹川
田中　宏欣
原爆展来場者
栗田八重子

追悼碑の会への寄付、カンパ

江戸川平和運動センター　土田アイ子
世代を結ぶ平和の像の会　羽入　恭子
泉福寺　羽生百合子
都教職員組合江戸川支部　渋谷　俶子
熊野会母の会　大石亜紀子
田中石材　田辺　和彦
前田　成子　藤井　幸子
江戸川原水協　渡部　信教
立正佼成会江戸川教会



『黒い雨』1989年
監督／今村昌平
脚本／石堂淑朗、今村昌平
原作／井伏鱒二『黒い雨』1965年
主演／田中好子

黒い雨を浴びたことで、原爆の二次被爆の被害と差別で変えられてしまった家族の悲劇を描いた作品。


主人公が黒い雨を浴びるシーン

数々の展示品





広島基町高校の生徒が描いた原爆の
絵を見ながら語り合う親子連れ



原爆展のポスターにも
なった土で描かれた原爆
ドームを覗き込む方



80年前の同年代の少年の絵を見ながら、
彼女たちは何を感じたのでしょうか


長崎の被爆資料を
共に見つめる父子


被爆前後の小学校の写真を見
比べ、興味を惹かれたお子さ
んに何かを説明するお母さん


会場内のテーブルに置いてあった折り紙は、
最終日にはこれだけの鶴が折られていました


『原爆の図』の世界を間近に
感じている様子の親子連れ

原爆展は、展示品も多くのご協力をいただきました。中でもメインとなったのは、埼玉県東松山市にある丸木美術館からお借りした、丸木位里・丸木俊夫妻が魂を込めて描き上げた『原爆の図』の原寸大レプリカです。

全15部からなる『原爆の図』の中から、第1部～第4部までは原寸大レプリカを、第5部～第8部までを縮小版でお借りし展示しました。

また、広島市立基町高等学校創造表現コースの生徒たちが被爆者に聞き取りしながら描いた『原爆の絵』。その他、原子爆弾『ファットマン』と『リトルボーイ』の原寸大模型など、多くの来場者が過去に目にしたことのない作品や資料が展示され、食い入るように覗き込む方や多くのお子さんの姿もありました。作品や資料から戦争や原爆の恐ろしさ、悲惨さを感じ、心に留めていただけたら幸いです。

第45回江戸川区原爆犠牲者追悼式

梅雨が明けた直後の7月20日、「第45回江戸川区原爆犠牲者追悼式」が葛西区民館及び滝野公園追悼碑前にて行われました。

冒頭の挨拶で山本親江会会長は、追悼碑の噴水に関するエピソードを披露されました。

追悼碑建立後、制作でお世話になった田中石材の社長さんは毎年、追悼式の最中、合図があると追悼碑の後ろにある水道からホースで水を噴水のようにかけてくださっていたそうです。それから3年後、現在の立派な噴水が設置されたそうです。皆様のご尽力により支えられているのを感じるエピソードでした。ちなみに、追悼碑には毎日8時からと11時からの30分間、被爆の時間に合わせて噴水が出ています。



第25回 戦争展 in EDOGAWA

9月14、15日、船堀タワーホール展示室にて毎年恒例となった戦争展が開催されました。親江会では多くの展示物と、次世代をつなぐ中学、高校生の思い、古今亭菊太楼さんの原爆落語『母のお守り』などのイベントを開催しました。詳細は次号でお知らせいたします。



1ヶ月前の原爆展とはまた違うレイアウトの展示に見入る家族連れの姿も

被爆を自分の身に置き換えて

広島被爆　貫泰夫

被爆当時7歳。兄と姉は廿日市に集団疎開していて、当時の家族は、広島鉄道局勤務の父親と母親、私と3つ下の妹、父方のお婆さんの5人家族でした。家の庭で遊ぶ我々を見ながら母親はよく涙を流していました。上のふたりはどうしているかと、さびしかったのでしょう。楽しい思い出はないけど、隣の畑で芋や蓮根を取って食べたりする程度でした。

被爆当日、家から50メートルくらい離れたところにある防火水槽の近くでトンボを追いかけて遊んでいた時「ドカン」ときました。爆心地から2・7キロ。びっくりして家に帰ったら、母親、お婆さん、妹はもう隣の畑に避難していました。その夜は蚊帳を持ち出し、畑で寝ました。だから隣の畑にはずいぶん助けられました。

家は土壁が落ちて瓦が飛び、家の中のものは爆風でめちゃくちゃになってしまいましたが、幸い家族の命は無事でした。ただ、父親の安否が心配でした。

父親は運動神経が鈍かったですが、宇品線の南段原駅から広島駅に着いて被爆。プラットホーム

に伏せたおかげで被害を免れ、線路伝いに歩いて帰ってきたそうです。

宇品線は市内寄りにホームがあり、被爆しやすいところでした。帰るとき電車を見ると、吊り革持った人たちが黒焦げになっていたと言っていました。

私たちがそれが爆弾だと知ったのは、10時前くらいに市内の中心地にいた学童疎開の人が帰ってくる姿を見たときでした。落ちた時はわからなかったけど、そのあと出た言葉が「原子爆弾だな」と。ピカドンです。



学校は救護所に変わり、多くの被爆者や遺体を目の当たりにしました。夜になるとうちからは的場から広島駅にかけて、もうもうと炎が上がっているのが見えました。近所からは被爆した人たちの泣き声が連日聞こえました。自分は、大変なことになったということだけであとはよく覚えていません。

核は常に危機感がつきまとう。戦争は嫌です。戦争は悲劇です。残酷で残忍です。戦後77年、今も戦争をしている国があり、脅しで核を持ち出しますが、本当にけしからんことです。世界から未だ戦争も核兵器もなくならない。それがどんな悲劇を生むのか、自分の身に置き換えじっくり考えるべきです。

被爆体験ＤＶＤより
２０２２年収録

脳裏にこびりつく人が焼ける匂い

広島被爆　奥田豊治

当時15歳、山口県立豊浦中学校2年生でした。陸軍予科士官学校の1次試験に合格し、8月10日頃広島で2次試験を受けることになっていました。

憲兵に、「広島が壊滅状態だ。君もすぐに行け」と言われ、やっと動き始めた列車に乗り、ひとり広島に。その時は試験を受けるためだと思っていました。

8月9日、広島駅が近づき、電車が鉄橋に差し掛かった。今思うとそれは大田川です。何気なく下を見ると、真っ先に目に入ったのが、川面いっぱいの馬。黒焦げになって腹がパンパンに膨れた馬でした。それがダーッと一面に浮かんでいて驚きました。おそらくそのときは、人の死体もあったと思うが、近視だったので確認はできませんでした。

広島駅に着き、ホームから駅舎に入ると壁しかない。これも驚いた。本当に壁だけ。

「どうしたんだろ。憲兵さんがすごい爆弾って言ってたけど、何な

葛西祭りにて親江会ブース出店します

10月19日(日)、葛西にある滝野公園で行われる葛西祭りにて、親江会も例年どおり水飴販売を行います。毎年、子どもからおとなまで、行列ができるほど人気の水飴屋と、平和を祈る折り鶴コーナーを設置予定です。皆様のおいでをおまちしております。

日時　２０２５年10月19日（日）
10時～15時半　滝野公園にて

んだろう」と思っていました。このとき、私は入市被爆しました。

目的地は軍司令部で広島城の中です。私は広島の出身ではないので良くわからなかったのですが、市電に乗れば行けると思っていました。

駅を出て市電の停留所まで行くまでの光景にさらに驚きました。街がぺっちゃんこなんです。広島の街は上から押しつぶされ、焼けて何もなくなっていました。焼けた家とは違う、上から「ペシャッ」と押し潰されたような形で焼けているんです。びっくりしながら電車道を伝って歩いて行ったんですが、未だにどの道を行ったのかわかりません。

すると、電車がいました。市電が線路に乗っていたんですが、もちろん人影なんか見えません。目に入ったのは、熱で溶けた金属が、電車から道路に流れ出ていたんです。そばに行って見ると、おそらくモーターの銅線だと思うんですが、銅が溶けるほどの高温てすごいなと思ったことを覚えてます。

歩いていくと、ペシャンコぶりや焼けっぷりというのかそれが、だんだんひどくなってくる。そして、匂い。この匂いが忘れられません。人が焼ける匂いです。そして、剥がれた皮膚が垂れ下がり、木切れに捕まって、「おかあさん、おかあさん」と呟きながらヨタヨタ歩く少年とすれ違った時、「戦争は嫌だ」と思いました。それでも、軍司令部に行かなきゃならないという、いかにも中学生らしい必死な思いで一生懸命歩いて行きました。

するとお城が崩れていて、前の市民球場の前あたりだと思いますが、どこから持ってきたのか机が置いてあり、そこに将校がいました。「あ、いた！」と思い、その将校の前に行き礼をし、「士官の試験のためにきました」と申告をしました。するとその将校が、「今来ても何もわからん。すぐ帰れ」と言うんです。憲兵は「行け」、将校は「帰れ」と。言われた途端に今まで張り詰めていた気持ちがいっぺんに切れてしまいました。ものすごく喉が乾いてたので、水を探したら水道の蛇口から水がちょろちょろ出ていて、そこにむしゃぶりついてゴクゴク飲みました。

ヘナヘナとその場に座り込み、周りを見渡してみると、いままで周りにボロキレがいっぱいあると思っていたのが、全て死体でした。おそらくその辺の死体を集めてきたんでしょう。人間の形をしてないものもあり、本当にボロキレのようで、それがたくさん積み重なっていました。後からわかったのですが、そのとき目の前にあったのが、その後の『原爆ドーム』でした。

それから数十年後、長崎の街で被爆体験を伝える活動をする高校生に出会い、私も自らの体験を語るようになりました。核兵器は絶対に無くさないといけないのです。

被爆体験ＤＶＤより
２０１８年収録

核兵器廃絶キャンドル行進

8月6日夕刻、葛西の滝野公園から西葛西の清新町健康サポートセンターまで反核のためのキャンドル行進が行われました。約70人が集まり、シュプレヒコールを上げました。



滝野公園から西葛西までの道のりを、「核兵器反対」の声を上げながら行進しました

平和学習で学んだこと

瑞江第三中学校

僕の決意

長谷川大翔

僕はこのレポートを書いてあらためて平和の尊さや、平和にどう向き合うべきなのかをしっかりと理解できました。僕にとっての平和とは、「人が人を殺すことのない日常」です。戦争は決してゲームや映画のようなものではなく、現実にたくさんの命を奪い、人々の当たり前の日常を壊してしまうものです。だからこそ、僕はこの歴史を絶対に忘れず、日本で生きていく限り、平和の大切さを心に刻んでいたいと思います。

戦争で一番犠牲になるのは、国を守るために戦場に立たされる兵士や、何の罪もない国民です。そんな悲劇を二度と繰り返さないために、大人になった僕は、どんな時も暴力に頼らず、話し合いや思いやりで物事を解決できる人間でいたいと思いました。

核兵器廃絶を目指して

森本涼太

私は被爆から80年経ち、世界でどのような取り組みが行われているのか調べました。

２０２５年現在、世界の核弾頭の数は１万２３４０発とされており、去年より２２０発増加しています。「世界の核弾頭データ」が公開されてから年々核兵器の数は減少していましたが、今年は統計初の増加となりました。理由は、近年の国際情勢の緊張化により核兵器の役割を重視する国が増え、「核兵器を作るスピード」が「核兵器を減らすスピード」を上回ってしまったからだと考えられます。

また、今でも使うことができる核弾頭数を見ると、９か国中６カ国が数を増やしていて、現役の核弾頭数は全体の８割ほど、合計９６１５発で８年間で３６４発、直近１年間でも32発の核兵器が作られています。

いっぽう、核兵器廃絶に向けて様々な条約が作られています。その中の１つが『核兵器禁止条約』です。これは２０１７年に国際連合で決められた条約で、調印した国は、核兵器の開発、保有、使用を含むあらゆる活動を例外なく禁止されます。

『鳩になって』第６集完成

第５集発行から11年経った今年、被爆者証言集『鳩になって』第６集を発行することができました。緑色の表紙の冊子です。近々配布予定ですので、どうぞご覧になってください。



21名の被爆証言と被爆二世、三世6名、生徒、学生たち11名の思いを掲載しています

現在の署名国は95カ国ですが、唯一の被爆国である日本は参加していません。今年1月にも広島、長崎の両市長が石破総理に、3月開催の核兵器禁止条約会議への参加を提案しましたが、石破総理は「他の国の検証をする」として参加を見送りました。

唯一の被爆国であるにもかかわらず、日本がこの条約に参加しない理由は主に2つあります。1つはアメリカの「核の傘」に依存しているためです。「核の傘」とは、他国から核攻撃を受けた時、代わりに核保有国が核兵器を使い反撃するという状態のことです。条約に調印してしまうと日本は「核の傘」から離れる必要があり、他の国からの攻撃を受けやすくなってしまうことがあります。

2つ目は、核兵器禁止条約には問題点も多いからです。核保有国は条約に署名すると、防衛や攻撃用の核兵器を手放す必要があるため、保有国にとってはデメリットになります。このように日本が条約に参加しない理由は、核兵器廃絶の実現が難しいことや、他の国との関係が主な原因と思われます。

私たちはこれまで3年間にわたって見たり聞いたり調べたりして、「自分の国ばかりを優先しない」「世界の紛争について知る」「外国人を差別しない」など、平和について意見や考えを持つ人が多くなりました。しかし戦後80年目の今は、ウクライナ戦争など、世界は不安定な状態が続いています。



今の日本

小川美空

日本は被爆国として、核兵器のない世界を訴えています。また、広島や長崎などでは戦争の記憶を語り継ぐための施設があり、世界の平和活動にお金や技術で協力し、兵力により平和をつくることをやめ、世界に平和を伝える国となっています。

しかし、それは本当に世界に届いているのでしょうか。私は先日、ニュースでアメリカのトランプ大統領の「原爆投下は正当だった」という発言を聞き、日本とアメリカとで戦争や原爆への考え方の差を感じました。私はその差の原因は、原爆や戦争の伝え方の違いにあると思いました。

戦後30年以上、アメリカの教科書では、原爆の投下を、「日本を降伏させるために必要だった」「これによりアメリカ兵の命が救われた」と正当化して書かれていたそうです。

しかし1980年頃からは、「原爆投下」という事実関係を語るだけになり、さらに、「原爆が自分たちの都市に落とされたらどうなるか」などを生徒に議論させる項目も記載されるようになりました。

そのためか、アメリカ人を対象に行われた、「原爆投下は正しかったか」というアンケートでは、高年層ちを繰り返さないために、核兵器がどれだけ多くの人を失い、苦しませ悲しませるのかを知り、次の世代、また次の世代へと繋げることが大切だと思いました。

は「正しい」という意見が多いのに対し、若年層は「正しくない」という意見が多いようです。このことから、教科書の内容により、原爆への意識が変わることがわかります。

他にも、真珠湾攻撃について日本の教科書では、「日本海軍がハワイの真珠湾を奇襲攻撃した」と事実を述べているのに対し、アメリカの教科書では、「日本は騙し討ちをした」「裏切った」という表現が見られます。つまり、日本とアメリカで私たち生徒に真珠湾攻撃のことを伝えるときに違いが生まれます。

私が言いたいのは、伝え方によって原爆や戦争への意識を変えてしまうということです。その意識の違いが、平和を世界に伝える妨げになっていると感じます。これをなくすには、意識の違いに気づき、多角的に戦争を見ることが必要です。

私たち日本人が学んできた戦争は本当に正しいのか。それを確かめるために私はアメリカの教科書を調べ、日本とアメリカの二つの方向から戦争を見ました。また、私たちは平和学習で、日本が他国に被害を与えたことについて調べ、日本も加害者であるということがわかりました。加害者の日本は、被害者の日本と共に語り継いでいかないといけないものだと思います。そして昔の日本が行なったことを知ることは、戦争の全貌を知るための一歩になり、偏った情報から抜け出すことにも繋がります。これは世界に平和を伝えることにおいて、とても大切なことです。

戦争の全貌に近づくのはとても難しく、時に心が痛むこともあります。しかし、戦争により奪われる命をこれ以上増やしたくないという自分の気持ちは変わりません。私は偏った情報から抜け出し、戦争の全貌を知った上で、平和を伝えていく一人になりたいです。

広島・長崎と原爆

直井愛佳

私たちは1年生で親江会の方をお招きして広島、長崎の原子爆弾とその被害について学びました。また3月には、ここ江戸川区も被害にあった東京大空襲について調べました。

私たちが住む瑞江には畑が多かったそうですが、焼夷弾がたくさん落ち、畑の中に埋まっていた話を聞きました。

2年生では都内巡りで見学地の中に戦跡を入れて都内を歩きました。東京大空襲戦資料センターや、戦争時の焼けた銀杏の木、上野動物園のゾウの慰霊碑などを見た班もありました。

そして3年生になり、沖縄戦について学習しました。今年は沖縄返還から53年、私たちの瑞江第三中学校ができた1972年に返還されたことを知りました。そして、今年もまた鶴を折り始め、千羽を折り上げました。

今年は、折り鶴を全校生徒に声をかけ、昼休みに折ることにしました。3年生のオープンルームでは一人一人が色とりどりの鶴を折り、お昼休みには1年生、2年生が3年生のフロアに来て仲良く教え合いながら制作を行いました。全校生徒の努力もあり、今では200羽の鶴が出来上がりました。この取り組みは、一人一人が平和への貢献、原爆への意識へとつなぐ一歩になると考えました。このように、たった一人のとても小さな努力が積み重なり、未来への平和につながることを私たちは心から願っています。

江戸川区原爆犠牲者追悼式

都立葛西南高校 生徒会長小西仁聖

はじめに、第二次世界大戦で命を落とされた全ての方々に深くお悔やみ申し上げます。加えて、3月に引き続き、平和について考える貴重な機会をいただきましたことを深く感謝申し上げます。

80年前の1945年8月6日と8月9日、広島と長崎に原子爆弾が投下されました。広島には『リトルボーイ』、長崎には『ファットマン』というコードネームがつけられた爆弾が投下され、その結果、広島では約14万人、長崎では約7万人の尊い命が失われました。私たち若者は、戦争を経験していないからこそ戦争中に何が起こったのかを学び、考え、次の世代に語り継ぐことが私たちの責任であると考えます。

私が「戦争」という言葉を、自分のこととして強く意識したのは中学2年生の夏でした。『はだしのゲン』という中沢啓治さんのアニメを見たのがきっかけです。この作品は、広島に原爆が落とされた時代を生き抜いた9歳の少年『ゲン』の姿を通して、戦争の現実を描いている作品です。

ゲンは何とか命を取り留め、家にいた母も奇跡的に助かりました。しかし、父と姉と弟は家の下敷きになってしまい、逃げることもできずに炎に包まれ命を落としたのです。

ゲンの母は泣き叫び、焼け野原となった街を裸足で歩き、皮膚がただれた人々が歩き回るなか、食べ物を探しながら必死に生きて行きます。その姿は、アニメでありながらリアルに描写されており、強く胸に残りました。

一瞬で家族を失い、焼け焦げた街をさまよう少年の姿に、私は胸を締め付けられる思いでした。そして同時に、強い疑問が心に刻まれました。

「なぜこのようなことが起きたのか。戦争は本当に避けられなかったのか」

日本は唯一の被爆国として歴史を語ることが多くあります。原爆がいかに非人道的で恐ろしい兵器なのか、語り継ぐことは絶対に欠かせないことです。しかし、それだけでは足りないと感じませんか？

日本は世界恐慌後、外交的、経済的に行き詰まると孤立感を深めて力の行使による解決を試みた結果、世界の体勢を見失い、戦争への道を進んでいきました。日本と戦火を交えた国々において、数多くの命が失われたということも、戦場の影に深く名誉と尊厳を傷つけられた人々がいたことも忘れてはなりません。その事実を知ってしっかりと受け止めなければ、私たちは本当の意味で平和について考えることはできないのではないかと感じています。

例えば『はだしのゲン』の作中でゲンの父親が、「ワシは日本のことを思えばこそ、戦争に反対しているのだ」と語り、そこで町の人々から非国民と罵られてしまいます。戦争に反対することさえ許されなかった当時、多くの人々が、「戦争は仕方ない」と信じ込まされていたのです。私は、そんな時代を生きることは不可能でしょう。しかし、過去を学ぶことで同じ過ちを繰り返さないようにすることは、今の私たちにもできるはずです。

そしてもう1つ強く感じているものは、「無関心」こそが最大の敵だということです。戦争はある日突然始まるわけではありません。

小さな分断や差別、対話の喪失が少しずつ積み重なり、気づいた時には手遅れになってしまいます。だからこそ、私たちは日常の中で違う考えを持つ人を理解しようとする姿勢が大切なのではと考えます。

世界に目を向ければ、今も戦争や紛争は絶えません。ウクライナ、パレスチナやアフリカの国々、その真実を見ても「遠い国」の出来事のように感じてしまうことがあります。実際に私もその一人です。しかしある時「身近なこと」なのだと気づかされる出来事がありました。

私の一つ上の先輩は韓国籍を持っており、兵役の義務のために来年から韓国の軍に入ることが決まっているのです。その時、彼は「国の命令だから仕方なく行く」と話し、私はすごいなと考えると同時に、「もし韓国で戦争が起きたら」と考えた時、思わず涙がこぼれそうになりました。

もしかしたら彼とはもう会えなくなるかもしれない。一緒に笑うこともできなくなるかもしれない。命を落とすかもしれない。そして万が一、日本と韓国が敵同士になってしまったら私はどうしたらいいんだろうか。大切な友達を敵として向き合わなければならない時代が来るかもしれない、そう思うと、戦争は本当に「身近にある」と痛感しました。

だから私は、「知る」ことから伝えること、自分の言葉で語れるようになることから平和を語り継ぐ一歩としたいです。そして将来、私は小学校教員になりたいと考えています。子供たちに、ただ知識としての「戦争」を教えるのではなく、一人一人の命がどれだけ重く、どれだけ奪ってはいけないものなのか、自分の言葉や自分の思いで語り継げる教員になりたいです。

過去を知ることは未来を守ること。教室の中で「違い」を認めること、「人を大切にすること」、「命に向き合うこと」を伝えていける、そんな教員になりたいです。平和は誰かが作ってくれるものではありません。私たち一人一人が考え、行動しようとすることで少しずつ導かれていくものだと思います。

最後に、原爆で亡くなられたすべての方々に心より哀悼の意を表します。そして、私たちが「過去に向き合う勇気」と「未来を変える意志」を持ち続けていけるよう、これからも努力していきたいと考えます。そして、これは嘘偽りなく後世に語り継ぐべき歴史なのだとあらためて実感しました。

江戸川区職員参拝式

原爆展開催中の8月6日、滝野公園内江戸川原爆犠牲者追悼碑前にて、斉藤猛江戸川区長および、江戸川区幹部職員の皆様約107名による参拝式が執り行われました。

例年にもまして暑い朝でしたが、80年前の同じ朝に思いを馳せ、黙祷ならびに追悼碑へ献花いただきました。毎年のご参拝に心より感謝いたします。



『原水爆禁止世界大会in長崎』に参加して

二世会員　山下　秀則

8月7日から9日まで行われた『原水爆禁止世界大会in長崎』は、戦後80年の記念大会となり、世界各国の代表の方々が参加して行われました。

江戸川区の代表として参加できたことは、自分自身の故郷ということもあり貴重な経験となりました。雨の多い3日間でしたが行動の際は止み間が続き、予定通りに様々な取り組みができたのは幸いでした。



「ふりそでの少女像」製作者の余江さん（写真中央）と

行動する中で、最初に乗ったタクシーの運転手さんが、たまたま私の小学校の後輩で、もちろん面識はありませんが、当時の話で盛り上がりました。次に乗ったタクシーの運転手さんは軍艦島出身の方で、思い出話を色々聞くことができました。

その中でも特に心に残ったのは、長崎原爆資料館の屋上にある「ふりそでの少女像」(『未来を生きる子ら』の像)の制作者との出会いでした。

原爆で娘さんを亡くしたお母さんが、画家の松添博さんの描いた一枚の『ふりそでの少女』の絵と出会い、43年ぶりに自分の娘の最期の様子を知ることができ、涙されたそうです。供養のため「お地蔵さんを建てたい」というお母さんの願いを聞いた中学生らが中心となり、募金活動をして建てられたのが「ふりそでの少女像」です。

その像の前で制作者の余江勝彦さんと出会い、話の中で、「戦争さえなければ、原爆さえなければこんな悲しい親子の物語にならずに済んだのに」との言葉が忘れられません。この話は広島、長崎で亡くなった何十万の方々のひとつのエピソードかもしれませんが、私たち親子の心に深く刻まれました。

やはり、この地球上に戦争や核を無くす行動を絶やすこと無く続けて行かなくてはならない。自分もそうであるし、自分の子、孫にも平和活動の大切さを継承していこうとの思いが、今回の世界大会やその後の分散会に参加して更に強くなりました。



江戸川区の木も元気に育っています

世界大会で被爆者の田中熙巳さんの話を聞きながら、このように直接話を聞く機会がだんだん少なくなると思い、一つ一つの機会が貴重な時間になるとあらためて思いました。

親江会の皆様と様々な活動を通して、後世に伝えるべき話を聞き漏らす事無く次の世代へ伝えることこそ、二世会員の役目なのだと痛感出来たことが今回の世界大会に参加しての一番の収穫であったと思います。